

『琉球譯』エ段音の漢字表記について

趙 志 剛

1. はじめに

現代琉球方言の3母音 i, a, u は、古く i, e, a, o, u の5母音から変化してきたと言われている。即ち、古代日本語の e 及び o に対応する母音が狭母音化することである。この三母音化現象は、本土方言と琉球方言を分かち音韻上の特色であるが、その変化時期をめぐって種々の異なった学説があり、未だ定かではない。以下、従来の諸説を紹介しておく。

仮名資料『おもろさうし』（1531～1623）の研究に基づいた伊波（1930）では、「eo がそれぞれ iu に変わったのは、一足飛では無く、漸次的であつた筈だから、いつ頃から変り始めたかは知る術も無く、オモロ及び金石文の仮名遣を調べて見ても、エ列とイ列との、又オ列とウ列との区別が判然してゐるので、子音の口蓋化もしくは湿音化は、殆ど見出すことが出来ない」（P. 22）と述べている。更に、伊波（1933）では、「現に沖縄島の北部の老人達の語音には、国語のエに當る [i] と在来の [i] との間に、いくらかの開きがあるといひ、首里方言でも、一世紀前までは、同様な現象があつたといひ、田島先生も、三十年前に、首里那覇の老人達の語音には国語のオに當る [u] と在来の [u] との間には幾分の開きがあるといつて居られたから、平仮名を借用して、オモロを表記した当初（鎌倉期以前）には、その間にかなりはつきりした区別があつたに違ひない」（P. 20）と述べている。

高橋（1991）は、『おもろさうし』のエ段音とイ段音の仮名の混用例を調べた結果、「『おもろさうし』のエ段の仮名とイ段の仮名は「へ」「ゑ」「い」を除いて、ほぼ規則的に使われていて、発音を忠実に写しているといえる。また、そのことから、『おもろさうし』時代は、ア行、ハ行（特に語中）、ワ行を除いては、エ段の母音とイ段の母音との間にほぼ区別があつたといえる（区別を失いかけていたとしても、最も初期の段階である）」（P. 98）と述べている。

更に、ハングル資料『語音翻訳』（1501）には、/エ/に当たるものをハングルの [i] [jɔi] [jɔ] [wi] [ɰi] で表記しているものがある。多和田（1997）は、「ハングルの [i] [jɔi] [jɔ] [wi] は*/エ/の異音を表記したと考えられ、[e] が [i] へと変化していく過程における中間的な母音の姿を写し取っていると見ることができる」（P. 30）と述べている。

上の説を纏めると、『語音翻訳』が反映している15世紀前後も『おもしろさうし』が反映している16～17世紀以前も、エ段音がイ段音に合流していなかったと言えよう。エ段音がイ段音に移行している段階だと考えられる。

それに対して、外間(1971)は、「方言化への傾斜を始めた一二世紀頃から母音変化の様相を胚胎していたかどうか、あかしの立てようがないが、私は、文献時代（一五世紀末以降）に入る直前頃にはかなりの程度まで三母音化現象が進んでいたに違いないと考えている」（P. 34）と述べている。その根拠としては、『おもしろさうし』と外国語で書かれた琉球語資料『琉球館訳語』『語音翻訳』も、三母音的に書かれていることを挙げている。但し、立論の根拠としての『琉球館訳語』は、成立年代が未だ不明のため、俄に『おもしろさうし』と同時期の資料として扱うのは、妥当ではないと考えられる。また、『語音翻訳』から引用した「酒 사고」「舌頭 시자」は、三母音を反映している例としてはふさわしくないと考えられる。

中本(1990)も、『おもしろさうし』の仮名遣いを検討し、「母音変化として、高母音化現象の $o \rightarrow u$ 、 $e \rightarrow i$ が、すでに起こっている。本来の o と u 、 e と i がそれぞれ統合したとみてよい」（P. 871）と述べている。

以上、述べたように同じ仮名資料『おもしろさうし』に基づきながら、学者によって説が分かれている。これは、『おもしろさうし』の表記法を如何に解釈するかによるものである。

このような状況下において、中国語資料が有力な参考資料として役に立つ。他の資料と比較、対照することで、沖縄語音韻史研究に新たな光を与えることができると考えられる。沖縄語をあまり知らない中国人は、当時の沖縄語の音声を聞いたまま、忠実に記録したはずである。『おもしろさうし』の表記のように、規範意識による「類推仮名遣い」のようなことはしなかったはずである。この点から見れば、漢字資料は非常に有効な言語資料だと言えよう。

本論は、中国資料『琉球譯』^(注1)を用いて19世紀の沖縄語^(注2)のエ段音について検討してみようとするものである。もちろん、一資料を通してエ段音がイ段音に変化した時期及び変化過程を直ちに明らかにすることはできないが、三母音化の全貌を明らかにする一歩としての意味があると思われる。

2. 『琉球譯』の体裁と研究方法

『琉球譯』は、語彙の種類によって音、訓、言、天、地、人などの19部門に分類されている。この分類方法は、古く中国の字典『爾雅』にまで遡ることができる。沖縄語の表記法は、2種類に分けられている。「譯音第一」には、見出し語の後ろに「俱讀若○」と示される。例えば、通し番号51には「餐參三散産算讚燦燦燦山巒俱讀若三」と記す。その他の部分は、見出し語の後ろに「巨○」と示される。例えば、通し番号148には「聲巨古一」

と記す。これらの方法は、漢の許慎『説文解字』の「読若」法と「直音」法に習ったと考えられる。すなわち、表意文字である漢字を、表音文字として沖縄語の記述に用いたものである。漢字の内蔵している意味を捨てて、音読みだけを借りる「仮借」の方法で利用されている。このような表記法は、ほかの沖縄語漢字資料にも共通している。

本稿は、『琉球譯』エ段音の音訳字を整理、分析することにより、19世紀初頭の沖縄語のエ段音を明らかにしようとするものである。音訳字に基づいて沖縄語の発音を知るためには、まずその基になった中国漢字音の音価を知らなければならない。但し、直接漢字音を知ることのできる文献が見つからないため、次善の方法として、この資料より少し古い字書『中原音韻』(1324)^(注3)と少し新しい字書『華英辞典』(1892)^(注4)を用いて漢字音を推定することにした。更に、エ段音の変化についても考えることにする。

3、エ段音の漢字表記

(1) 「エ」の漢字表記について

「エ」に相当するものは、漢字「一」(46)、「以」(3)、「宜」(2)、「伊」(2)、「烟」(1)で表記されている。()内の数字は、用例数を示す。以下、同じ。代表例を1つずつ挙げる。

股曰一答【えだ】 襟曰以力【えり】 國吉山曰古宜古【こえく】
擇曰日虚伊喇的【ひえらびて】 蝦曰喀亦曰烟碑【えび】

以上の音訳字の音は、下の表の通りである。

エ	一	以	宜	伊	烟
中原音韻	iəi	i	i	i	ien
華英辞典	i	i	i	i	ien

「エ」に相当するものは、基本的に「一」で表記されている。19世紀初め頃には既に『華英辞典』の*i*になっていたと考えられる。この他、「以」「宜」「伊」も若干使われていて、韻母は全て*i*である。以上の音訳字の韻母から、「エ」の母音の音価は*[i]*であると推定される。

異例となる音訳字も一つある。「烟」の韻母は*ien*である。韻尾*n*は、後ろの子音の鼻音性を反映していると考えられる。主母音*e*が前の狭い介音*i*の影響を受けているが、韻母全体は*[i]*より*[e]*に近い音であると考えられる。次に、「エ」と「イ」との音訳字を比較してみる。

「エ」の音訳字：「一」(46)、「以」(3)、「伊」(2)、「宜」(2)、「烟」(1)

「イ」の音訳字：「一」(103)、「以」(58)、「伊」(7)、「亦」(6)

上の比較から音訳字「一」「以」「伊」は、「エ」と「イ」との両方の表記に使われてい

ることが分かる。殊に「一」と「以」とは、両方の表記で最も多く使われている。更に、以下の語例を見る。

噓楫（楫の誤写か）越逸乙一壹俱讀若一即【エツ/イツ】

易益掖腋奕疫域俱讀若一直【エキ/イキ】

「エ」と「イ」に相当するものは、共に「一」で表記されている。「一」は「エ」の表記では85%を占めていて、「イ」の表記では60%を占めている。これは、「エ」と「イ」とが同音になっていることを物語っている。既述の「エ」の音訳字の韻母が*i*であることを考え合わせると、「エ」が【*i*】であったと考えられる。

(2) 「ケ」の漢字表記について

「ケ」に相当するものは、漢字「及」（65）、「直」（7）、「奇」（4）、「几」（1）、「吉」（1）で表記されている。代表例を1つずつ挙げる。

澹日一及【いけ】

池宮城日一直密雅骨昔骨【いけみやぐすく】

喜路間日佳奇呂麻【かけろま】（「加計呂麻」は鹿児島県、奄美大島の南西に大島海峡を隔てて位置する島。）

竹日答及亦日托几【たけ】

橘詰倍涵姑橘猶訖吃乞鉦迄迄吃闕蹶厥蕨屬紇壓厥潔缺決決傑傑瑛鳩挈跣觸映拮結咸穴血纈吉日吉即【キツ/ケツ】

以上の音訳字の音は、下の表の通りである。

ケ	及	直	奇	几	吉
中原音韻	kiəi	tʃiəi	k'i/ki	ki	kiəi
華英辞典	təi	tʃi	təi/təi	təi	təi

音訳字の中、「及」は79%も使われている。「及」の韻母も、19世紀初め頃には既に*i*に変化したと考えられる。同様に「吉」と「直」の韻母も*iəi*、*iəi*（介音*r*は曖昧な*i*である）から*i*になったと考えられる。依って、「ケ」の母音の音価は【*i*】であると推定される。次に、「キ」の音訳字と比較してみる。

「ケ」の音訳字：「及」（65）、「直」（7）、「奇」（4）、「其」（4）、「吉」（1）、「几」（1）、

「キ」の音訳字：「及」（166）、「直」（27）、「奇」（4）、「其」（1）、「吉」（2）、「几」（1）、

「机」（1）、「記」（1）、「幾」（1）、「気」（1）、「詰」（1）

「ケ」の音訳字は、すべて「キ」の表記に使われている。殊に「及」は、「ケ」表記で79%を占め、「キ」表記で78%を占めている。両方の表記で中心的な役割を果たしている。更に、以下の語例を見る。

髻日獨及奴及【ときのけ】

奎魁日煞及略及【さきがけ】

「ケ」と「キ」とに相当するものは、共に「及」で表記されている。これは、「ケ」と

「キ」とが同音になっていて、両方区別が付かなくなったことを物語っている。「ケ」の音訳字の韻母が*i*であることから、「ケ」の母音が [*i*] であったと考えられる。

(3) 「ゲ」の漢字表記について

「ゲ」に相当するものは、漢字「及」(10)、「日」(8)、「傑」(1)で表記されている。代表例を1つずつ挙げる。

鬢髻鬚髯曰許及【ひげ】 歎咻嘆曰那日古【なげく】

進表曰漂那阿傑的【ひょうをあげて】

以上の音訳字の音は、下の表の通りである。

ゲ	及	日	傑
中原音韻	kiəi	riəi	kie
華英辞典	təi	ri	təie

「及」の韻母は、既述のように*i*である。「日」の韻母は、先立つそり舌音*r*の影響で、*i*より後ろの中舌的な*i*になっている。『琉球譯』に現れている「日」の表記を纏めてみると、全て濁音の「ギ」と「ゲ」と「ジ」に限られていることが分かる。*r*は半歯音で、『韻鏡』では三等にしか現れない。正歯音の3(濁音)に似た発音であるから、濁音の表記に使われたのであろう。子音の近似性を求めた結果、韻母が*i*になった。依って、韻母*i*は、そり舌音の後ろに現れ、韻母*i*と相補分布をなしていることで、*e > i* 変化途中の音ではないと考えられる。「傑」の韻母は*ie*で、一例しかない。次に、「ギ」の音訳字と比較してみる。

「ゲ」の音訳字：「及」(10)、「日」(8)、「傑」(1)

「ギ」の音訳字：「及」(19)、「日」(17)、「直」(4)、「即」(2)、「其」(2)

「ゲ」の音訳字は、「傑」(1)を除いて全て「ギ」の表記にも使われていることが分かる。これは、「ゲ」と「ギ」とが同音になっていて、両方区別が付かなくなったことを物語っている。従って、「ゲ」の母音が [*i*] であったと考えられる。

(4) 「セ」の漢字表記について

「セ」に相当するものは、漢字「石」(15)、「十」(10)、「什」(2)、「息」(2)、「席」(2)、「駛」(1)、「世」(1)、「此」(1)、「昔」(1)で表記されている。代表例を1つずつ挙げる。

義意曰古古禄八石【ころばせ】 背曰土那喀【せなか】 瀬名填曰什拿發【せなは】

載曰奴息禄【のせる】 汗曰阿庶【あせ】 瀬曰駛【せ】

噫曰世不【むせぶ】 節曰此古宜即【せつくにち】 總曰阿瓦昔禄【あわせる】

以上の音訳字の音は、下の表の通りである。

セ	石	十	什	息	席	駛	世	此	昔
中原音韻	fɪəi	fɪəi	fɪəi	siəi	siəi	ʃi	fɪəi	ts'i	siəi
華英辞典	ʃi	ʃi	ʃi	ci	ci	ʃi	ʃi	tʃ'i	ci

「セ」に相当するものは、基本的に「石」「十」で表記されている。韻母は、i である。このほか、「什」「駛」「世」「此」の韻母も i である。韻母 i は全体の85%も占めていることから、当時の「セ」の母音の音価は [i] であるように考えられる。即ち、e が i に変化する途中の姿だと考えても良さそうである。次に、「シ」の音訳字と比較してみる。

「セ」の音訳字：「石」(15)、「十」(10)、「什」(2)、「息」(2)、「席」(2)、「昔」(1)
「世」(1)、「此」(1)、「駛」(1)

「シ」の音訳字：「石」(309)、「十」(18)、「什」(17)、「息」(9)、「席」(4)、「昔」(2)、
「失」(14)、「時」(6)、「是」(1)、「市」(1)、「識」(1)、「之」(1)、「細」(1)

「セ」の音訳字「石」「十」「什」「息」「席」「昔」は、「シ」の表記にも使われている。殊に、「石」と「十」は両方の表記で中心的な役割を果たしていると言える。更に、重複していない「シ」の音訳字の中、「識」を除いて「失」「時」「是」「市」「之」「細」の韻母も i である。依って、「セ」と「シ」は同音になっていることが分かる。更に、以下の語例を見る。

質室疾失瑟洗擲嫉扶鉄櫃鉄鎖碩痰吸雪折日十即【シツ/セツ】

七石席積夕赤責昔惜戚日石直【シキ/セキ】

同じ見出し語の中、「セ」と「シ」とに相当するものは、共に「十」「石」で表記されている。これは、「セ」と「シ」とが同音になっていることを物語っている。既述のように「セ」の音訳字の韻母が i、i であることから、「セ」の母音は [i] であったと考えられる。

では、なぜ韻母 i を含む音訳字を選んだのか。上の表を見れば分かるように、i の前はすべてそり舌音 ʃ、tʃ である。先立つそり舌音に引かれて後ろの韻母が i になったと考えられる。

(5) 「ゼ」の漢字表記について

「ゼ」に相当するものは、漢字「即」(6)、「日」(1)、「支」(1)で表記されている。代表例を1つずつ挙げる。

風日喀即【かぜ】 日實絶日且即【ジツ/ジツ/ゼツ】 鈔日支【ぜに】

以上の音訳字の音は、下の表の通りである。

ゼ	即	日	支
中原音韻	tsiəi	riəi	tʃi
華英辞典	tʃi	ri	tʃi

「ゼ」の音訳字の韻母は、『華英辞典』の i、i に纏めることができる。上で既に述べたように、i は i と相補分布をなしているため、「ゼ」の母音の音価も [i] であると推定される。次に、「ジ」の音訳字と比較して見る。

「ゼ」の音訳字：「即」(6)、「日」(1)、「支」(1)

「ジ」の音訳字：「日」(36)、「即」(2)、「及」(19)、「石」(3)、「直」(1)、「世」(1)、「失」(1)

「支」を除いて、「ゼ」の音訳字は全て「ジ」の表記に使われている。更に、以下の語例を見る。

日實絶日日即【ジツ/ゼツ】

「ゼ」と「ジ」に相当するものは、共に「日」で表記されている。これは、「ゼ」と「ジ」とが同音になっていることを物語っている。更に、既述のように「ゼ」の音訳字の韻母が i、i であることから、「ゼ」の母音は [i] であったと考えられる。

(6) 「テ」の漢字表記について

「テ」に相当するものは、漢字「的」(46)、「之」(7)、「治」(5)、「帝」(1)、「梯」(1)、「地」(1)で表記されている。代表例を1つつ挙げる。

棄廢日席的禄【すてる】 等待日末之【まちて】 竊物日胶跪治【かくして】

大醉日威帝【よひて】 波照間日巴梯呂麻【はてるま】 避人日胶屈力地【かくれて】

以上の音訳字の音は、下の表の通りである。

テ	的	之	治	帝	梯	地
中原音韻	tiəi	tʃi	tʃi	tiəi	t'iəi	ti
華英辞典	ti	tʃi	tʃi/tʃ'i	ti	t'i	ti

「テ」の音訳字の韻母は、『華英辞典』の i、i に纏めることができる。音訳字の韻母が i である「的」「帝」「梯」「地」は、全体の81%を占め、圧倒的に多い。「之」「治」の韻母は i であるが、そり舌音の後ろに現れ、i と相補分布をなしている。依って、「テ」の母音の音価は [i] であると推定される。次に、「チ」の音訳字と比較して見る。

「テ」の音訳字：「的」(46)、「之」(7)、「治」(5)、「帝」(1)、「梯」(1)、「地」(1)

「チ」の音訳字：「及」(55)、「直」(36)、「即」(12)、「之」(5)、「子」(2)、「鶏」(1)、「急」(1)、

「汁」(1)、「其」(1)、「齋」(1)、

他の行の段音と違って、「テ」の音訳字と「チ」の音訳字は、「之」を除いて混用は見られない。これは「テ」と「チ」とが区別されていることを物語っている。但し、この区別は子音の差に原因があり、簡単にいうと、「テ」te > ti、「チ」ti > tʃiに変化したためである。混用している「之」は、接続助詞「テ」の表記にのみ使われている。即ち、先立つ狭母音 i の影響で子音 t が tʃ に口蓋化したのである。よって、「テ」の母音は [i] であったと考えられる。

(7) 「デ」の漢字表記について

「デ」に相当するものは、漢字「的」(9)、「之」(1)で表記されている。代表例を1つずつ挙げる。

筆日服的【ふで】 死日石奴禄亦日申之之【しにて】

以上の音訳字の音は、下の表の通りである。

デ	的	之
中原音韻	tʃi	tʃi
華英辞典	ti	tʃi

「デ」の音訳字は、「的」と「之」との2字のみである。「的」は全て名詞に使われていて、「之」は全て接続助詞に使われている。「テ」の母音と同様、「デ」の母音の音価も [i] であると推定される。次に、「ぢ」の音訳字と比較してみる。

「デ」の音訳字：「的」(9)、「之」(1)

「ヂ」の音訳字：「及」(1)

「デ」の音訳字と「ぢ」の音訳字の間には、混用が見られない。これは「デ」と「ヂ」とが区別されていることを物語っている。但し、この区別も子音の差に原因があり、母音の違いによって生じたものではない。よって、「デ」の母音は [i] であったと考えられる。

(8) 「ネ」の漢字表記について

「ネ」に相当するものは、漢字「你」(51)、「泥」(3)で表記されている。代表例を1つずつ挙げる。

睡眠寝日你木禄【ねむる】 磬日牙奴泥一石【やのねいし】

以上の音訳字の音は、下の表の通りである。

ネ	你	泥
中原音韻	ni	niəi
華英辞典	ni	ni

「ネ」に相当するものは、ほとんど「你」で表記されている。韻母は i である。このほか、「泥」も3例あり、韻母が i である。依って、「ネ」の母音の音価は [i] であると推定される。次に、「ニ」の音訳字と比較してみる。

「ネ」の音訳字：「你」(51)、「泥」(3)

「ニ」の音訳字：「你」(3)、「泥」(4)、「宜」(47)、「賦」(1)、「呢」(1)、「日」(1)

「ネ」の音訳字は、全て「ニ」の表記にも使われていることが分かる。更に、以下の語例を見る。

舟艘艦船舳舻日父你【ふね】 鈔日支你【ぜに】

「ネ」と「ニ」に相当するものは、共に「你」で表記されている。これは、「ネ」と「ニ」とが同音になっていることを物語っている。更に、既述のように「ネ」の音訳字の韻母が i であることから、「ネ」の母音が [i] であったと考えられる。

(9) 「へ」の漢字表記について

「へ」に相当するものは、漢字「許」(3)、「非」(3)で表記されている。代表例を1つずつ挙げる。

蛇曰許比【へび】 歴曰非祿【へる】

以上の音訳字の音は、下の表の通りである。

へ	許	非
中原音韻	hiu	fəi
華英辞典	eü	fei

「へ」に相当するものは、「許」「非」で表記されている。「許」の韻母 ü は、u と i との間の音である。u と i とを速く連続的に発音した結果、[ü] に聞こえただろう。「非」には音が3つある。「華英辞典」には fei の1つのみを記しているが、高本漢『中国音韻学研究』「方言字彙」には fei のほか、陰陽平声に読む時は fui、上去声に読む時は fuei であると注釈している。「康熙字典」にも、「唐韻甫微切 集韻韻會匪微切 又集韻韻會正韻妃尾切 又集韻方未切」の3つの音が記されている。「非」は「ヒ」(現代首里方言の hwii に対応するもの)に対応するものの表記にも使われているため、音訳字の主母音が e であることは考えにくい。依って、「非」は [fui] で使われていると推定される。「許」「非」の介音 u は、首里方言のハ行の唇音性を反映していると考えられる。依って、「へ」の母音の音価は [i] であると考えられる。次に「ヒ」の音訳字と比較してみる。

「へ」の音訳字：「許」(3)、「非」(3)

「ヒ」の音訳字：「許」(57)、「非」(2)、「虚」(23)、「僻」(1)、「比」(1)、「失」(1)、「必」(1)

「へ」の音訳字は、全て「ヒ」の表記にも使われている。「へ」と「ヒ」とが同音になっていることを物語っている。更に、「へ」の音訳字の韻母が i であることから、「へ」の母音が [i] であったと考えられる。

(10) 「べ」の漢字表記について

「べ」に相当するものは、漢字「必」(6)、「比」(5)、「筆」(2)で表記されている。代表例を1つずつ挙げる。

帥統曰叔必祿【すべる】 夕又曰由比【ゆうべ】 綺曰七祿筆【つるべ】

以上の音訳字の音は、下の表の通りである。

べ	必	比	筆
中原音韻	piəi	pi	piəi
華英辞典	pi	pi	pi

「べ」の音訳字の韻母は、『華英辞典』では全て i である。依って、「べ」の母音の音価は [i] であると推定される。次に、「ピ」の音訳字と比較してみる。

「べ」の音訳字：「必」(6)、「比」(5)、「筆」(2)

「ピ」の音訳字：「必」(38)、「比」(12)、「筆」(2)、「烟」(1)、「許」(1)、「美」(1)、「毎」(1)

「べ」の音訳字は、全て「ピ」の表記にも使われている。これは、「べ」と「ピ」とが同音になっていて、両方に区別が付かなくなったことを物語っている。「べ」の音訳字の韻母が i であることから、「べ」の母音が [i] であったと考えられる。

(11) 「べ」の漢字表記について

「べ」に相当するものは、一例もない。

(12) 「メ」の漢字表記について

「メ」に相当するものは、漢字「眉」(30)、「米」(30)、「毎」(14)、「美」(7)、「密」(3)、「抹」(1)、「買」(1)で表記されている。代表例を1つずつ挙げる。

頌褒日父眉禄【ほめる】 要日喀那米【かなめ】 初俣始日法日毎【はじめ】
 女日木息美【むすめ】 天久日阿密骨【あめく】 収定日山茶(ママ)抹示【さだめし】
 查查看日都買禄【とめる】

以上の音訳字の音は、下の表の通りである。

メ	眉	米	毎	美	密	抹	買
中原音韻	muəi	muəi	muəi	muəi	muəi	mo	mai
華英辞典	mei	mi	mei	mei	mi	mei	mai

「メ」の音訳字の韻母は、『華英辞典』の ei と i に纏めることができる。韻母が ei である「眉」「毎」「美」「抹」「買」は合計53例ある。沖縄語の [e] かそれに近い音を反映していると考えられる。韻母が i である「米」「密」は合計33例ある。沖縄語の [i] を反映していると考えられる。韻母が ai である「買」は、一例しかない。音声学的に連母音 [ai] をぞんざいに発音すると [e:] に聞こえる。ei と同様沖縄語の [e] かそれに近い音を反映していると考えられる。【英琉辞典】^(註5)には、「搜し出す | Tumeyung」と表記している。

現代首里方言において、「メ」は「ミ」に変化するが、以上の「メ」の音訳字の韻母から、「メ」の母音が /i/ に変化したと言え切れない。次に「ミ」の音訳字と比較してみる。

「メ」の音訳字：「米」(30)、「眉」(30)、「密」(3)、「毎」(14)、「美」(7)、「抹」(1)、「買」(1)
 「ミ」の音訳字：「米」(132)、「眉」(5)、「密」(24)、「毎」(1)、「彌」(2)、「迷」(2)、
 「必」(1)、「未」(1)、「関」(1)、「味」(1)

「米」「密」の韻母は i である。「メ」が「ミ」に変化した部分を反映している。「眉」「毎」は「ミ」の表記にも使われ、「メ」と「ミ」との混同を表しているように見える。しかし、更に詳しく調べてみると、「眉」「毎」は「ミ」の表記では僅か6例、3.5%を占めているにすぎないのに対し、「メ」の表記では51.2%も占めている。依って、「眉」「毎」は主に「メ」の表記に使われていることが分かる。また、混用されていない音訳字もある。これは、「メ」と「ミ」とがまだ区別されていることを物語っている。

韻母が ei である「眉」「毎」「美」「抹」「買」は、/me /> /mi / の変化途中の姿を反映していると考えられる。但し、音訳字の中、韻母が e である音訳字がないことから、変化の後半の段階に対応していると考えられる。従って、他の行に比べ、マ行の狭母音化は遅れていることが分かる。但し、この理由については今後更なる検討を要する。

因みに、高本漢『中国音韻学研究』「方言字彙」によると、「眉」「美」は福州、温州では mi と、四川では me と発音されている。

(13) 「レ」の漢字表記について

「レ」に相当するものは、漢字「力」(42)、「里」(9)、「利」(1)、「麗」(1)で表記されている。代表例を1つずつ挙げる。

涎日由答力【よだれ】 晚日古里禄【くれる】 爛日答答利禄【ただれる】
 創日牙不麗【やぶれ】

以上の音訳字の音は、下の表の通りである。

レ	力	里	利	麗
中原音韻	liəi	li	li	liəi
華英辞典	li	li	li	li

「レ」の音訳字の韻母は、『華英辞典』ではすべて i に纏めることができる。依って、「レ」の母音の音価は [i] であると推定される。次に、「リ」の音訳字と比較してみる。

「レ」の音訳字：「力」(42)、「里」(9)、「利」(1)、「麗」(1)

「リ」の音訳字：「力」(100)、「里」(22)、「利」(9)、「禮」(5)、「一」(5)、「理」(4)、
 「以」(3)、「伊」(1)、「立」(1)、「衣」(1)、「依」(1)

「レ」の音訳字は、「麗」の一字を除いて全て「リ」の表記にも使われている。殊に、「力」「里」は両方の表記で中心的役割を果たしている。更に、以下の語例を見る。

烈烈荊蜩測颯列律栗劣立粒笠日力即【レッ/リツ】
 狩假段彼日喀力【かり/かれ】

「レ」と「リ」に相当するものは、共に「力」で表記されている。「レ」と「リ」とが同音になっていることを物語っている。「レ」の音訳字の韻母が*i*であることから、「レ」の母音が [i] であったと考えられる。

4. 結 論

以上、『琉球譯』のエ段音の音訳字を『中原音韻』と『華英辞典』を参考にして考察した。その結果、当時(1800)の沖縄語のエ段音の実態として次のことが指摘できる。

1. 韻母 *i* を含む音訳字が圧倒的に多いことから、エ段音の母音の音価は [i] であると推定できる。
2. 韻母 *i* を含む音訳字は、10%を占めている。韻母 *i* は、全てそり舌音 *r*、*s*、*ʃs* の後ろにのみ現れ、*i* と相補分布をなしている。
3. 韻母 *ei* を含む音訳字は、11%を占めているが、ほとんど「メ」の表記に使われている。/me/ > /mi/ の変化途中の姿だろう。従って、「メ」の狭母音化は、他のエ段音に比べると遅れていることが明らかになった。
4. 韻母 *ie*、*ei*、*ai* は、[e] 或いは [e] に近い音を表記していると考えられる。

以上、音訳字の韻母を整理してみると、当時の沖縄語のエ段音には [i] [e] が存在すると推定される。しかし、これらは意味の区別に関与していないので、音韻論的には /i/ とすることができる。即ち、当時(1800年頃)の沖縄語においては、エ段音がイ段音に合流していたと考えられる。但し、/me/と/mi/ は認められる。

「テ」と「チ」、「デ」と「ヂ」の音訳字の比較からもわかるように、混用例がほとんどない。「テ」「デ」の母音が *i* に変化したが、子音が狭母音 *i* の影響で口蓋化したため、両者の混同は避けられた。

『琉球譯』のような漢語が多く含まれている文書語でさえ、三母音化現象が完了していたことを示すので、口頭語における三母音化現象の完了は、さらに前の時代にまで遡ることが出来ると考えられる。それ故、三母音化現象が始まった時期、変化途中の時期及び三母音化現象が完了した時期についての研究が、更に要求されることになる。

本論で明らかになったことは、19世紀の沖縄語の音声・音韻の解明に止まらず、三母音化の変化時期を明らかにする上でも重要な意味を持つと考えられる。

注

- (1) 『琉球譯』は、嘉慶5(1800)年第2尚王統の尚温の冊封副使・李鼎元が沖縄に滞在した間、沖縄語を漢字の音のみ用いて表音的に書き表した中琉対訳語彙集である。『琉球譯』には、五千近くの単語が収められていて、それ以前のすべての資料に収録されている語彙の総数よりも多いため、沖縄

語及び中国語研究の重要な資料となる。

- (2) 本論で沖縄語というのは、『琉球譯』から帰納された言語を指す。
- (3) 『中原音韻』は、元泰定元年(1324)周德清によって編纂された韻書である。当時、元の首都大都(今の北京)の口語体系に基づいて編纂したものであるため、北京官話を分析するのに適切な資料だと考えられる。本稿において『中原音韻』は、藤堂明保『漢和大辞典』(1986年)によることにした。
- (4) 『華英辞典』は、ジャイルズ(Herbert Allen Giles 1845-1867 漢字名は翟理思あるいは翟理斯。イギリスの領事、中国学者)が1892年に編集した辞典である。当時の北京語がローマ字(Wade-Giles system)で表記されているので、近代北京語を分析するのに適切な資料であると考えられる。しかも、19世紀初めの広東、客家、福州、温州、寧波、揚州、四川などの方言も記されているので、漢字資料の基礎音系について考える際にも非常に役立つ辞典である。
- (5) 『英琉辞典』は、B、Jベッテルハイムが1851年に編纂したものである。原題は「English-loochooan Dictionary」で、自筆稿本は大英博物館に保存されている。

【付 記】

本稿は、平成16年度広島大学国語国文学会秋季研究集会における口頭発表に基づくものである。成稿の際、多和田眞一郎・沼本克明先生より懇切なご指導を賜った。また、査読の際、御担当の先生より貴重な御意見を賜った。あわせて心より厚く御礼申し上げたい。

— ちょう・しこう、広島大学大学院教育学研究科文化教育開発専攻 —